



【書評】野川博之著『疫中七絶日記』2020秋－
2021夏 於横濱 好文出版 A5判 二一六ページ 定価
二〇〇〇円＋税

野川博之氏は昭和四十三年（一九六八）横浜市生まれの五十三歳。文学博士である。著者にはこれまで仏教関係の著述が多い。そうした中であって、本書はこれまでとは違い、一昨年から昨年夏までにわたって、著者によって作られた三〇〇〇首余りの七言絶句の漢詩から、百首を自選したもの。七言絶句といえど、一行漢字七文字で起承転結を踏まえた四行詩をいうが、毎日かなりの数を作っておられるから驚きである。序文は中国語と日本語で書かれているが、日本語の序から一部を引用しておく。

（前略）コロナ禍のさなかにある横浜や都内のさまざまな場所を詠じたものを主要な内容とする。実は当初、芸能関連のものも採っており、自分では一読して破顔を禁じ得ないものばかりと信じていたが、今回は敢えて割愛し、次回以降を待ちたい。（後略）

（ここから書名の「疫中」は、現在、世間を席卷しているコロナ禍を意味し、本文で「七絶」が七言絶句の漢詩と理解できる。また、本書が中国からわが国に留学している大学院生を対象に書かれ、斬新なコロナ禍などをテーマに七言絶句という昔の中国の詩型を取ること、日本の友人との討議の材料にしてみたい、という著者の出版意図も序文に述べられている。

本書は横組みである。百番までの番号をアラビア数字で大きく出し、タイトルの下にはカッコ内に作詩年月日を小さく右寄せで記している。そして七言絶句の著者の作った漢詩。二段組みの右の各行に白丸と黒丸で平仄式と仄起式の韻の場所を示し、読者の便を図っている。次に訓読、口語訳、中国語の自注と続き、こうしたスタイルで百首全部が一貫している。

また序の後と跋にそれぞれ「代」として七言絶句を本文同様の形式で配していること、それを加えれば、本書の漢詩は、百二首ということとなる。このほか巻末に「各首韻目分類表」を置いている。

こうして眺めると、本書の内容は確かに現在続いている厳しいコロナ禍の中にあって、それとは関わりのない自然の移り変わりや、さり気ない町並みの佇まいを描きつつ、現代人の生活の営みと、このような困難を何とか克服しようとする人々の努力や希望を詠んでいるが、読み続けるに従って、漢詩独特の心地よいリズムミカルな響きが残り、口語訳が添えられているので、そのような作者の思いもよく理解されてくる。

読者はいつしかなるほどと、共感させられているのである。（元島根大学法文学部教授）

酒井 董美

ただよし